

「快拳」石川きよし坂戸市長の行政手腕に大きな拍手！
広域静苑組合加入へ 坂戸市9月定例会に関連議案を提案
長年の懸案課題を見事解決！

(2014年9月9日)

昭和五十一年二月、当時の狭山市・坂戸町・日高町・鶴ヶ島町・毛呂山町・越生町・鳩山町の一市六町は「広域斎場建設協議会」を発足し、さらに狭山市と日高町を除いた五町で「火葬場建設推進委員会」を設置し、広域による共同処理の検討が開始されることになったが、坂戸市は自前の火葬場建設路線に転じ、この委員会は解散することになった。その後、坂戸市は火葬場候補地を二ヶ所決定したが地元理解が得られなかったこともあり、平成十二年二月、止むなく建設計画の中止を決定した。

同年三月二十四日、宮崎元市長は広域静苑組合への加入依頼文書を管理者の越生町に提出し、同年五月十二日に就任した伊利前市長が七月二十四日に改めて組合加入を依頼するも、自前の火葬場建設を進める立場から「火葬場建設推進委員会」を解散した坂戸市の組合加入は容易に進まず、平成十四年十一月、静苑組合から「当面静観する」との回答があり、以来、坂戸市は火葬場を確保できないまま近隣の火葬場を利用させてもらう状態が続き、長い空白期間を過ごしていた。特に年末年始は十日間以上も火葬を待たされることもあり、坂戸市民にとって火葬場の確保はまさに切実な市民要望となっていたのである。

そうした中、平成二十四年五月十二日に就任した石川市長は、直後の五月二十三日、管理者の越生町長を訪ね、組合加入に対し特段の配慮をお願いする文書を持参し、さらに平成二十五年二月二十五日には新しく就任した新井町長を訪ね、広域連携の必要性を訴え、引き続き加入のお願いに出向いたという。

その結果、組合管理者の新井町長の理解を得、坂戸市加入に向けた検討が進むこととなり、同年三月、広域静苑越生斎場基本構想によって坂戸市加入の前提となる越生斎場増設が現在の敷地内で可能になることが明らかとなり、同年九月二十一日、新井町長の配慮のもと石川市長は自ら越生町の地元地区説明会に出向き、広域住民として坂戸市民の要望をご理解いただきたいと訴えたのであった。越生町地元地区説明会に参加した地元有識者の一人は、石川坂戸市長の姿勢に好感を持ったという。「そこには坂戸市長という肩書きなど外した一人の謙虚な坂戸市民が真心をもって静かに深く頭（こうべ）を下げる姿が強く印象に残りました。」という。また、その意を汲んだ新井越生町長も「度量のある人ですね」と語っていた。

坂戸市民の悲願を達成した

石川きよし市長の真心と誠意が実を結んだ!!

火葬場確保は石川市長の選挙公約であり、坂戸市民の切実な要望を実現しようとした石川市長の誠実な対応と、これを理解する広域静苑組合管理者の大きな尽力によって、平成二十五年十二月二十六日、組合から坂戸市に対して組合加入条件が提示されることとなり、坂戸市は組合加入後の負担を含めた総額十八億五千六百万円の負担を了解し、平成二十六年三月二十日、管理者に回答した。

その後、組合では坂戸市の組合加入に向け広域静苑組合規約の一部改正に着手し、坂戸市を追加する規約変更案をまとめ、坂戸市と構成自治体の鶴ヶ島市・毛呂山町・越生町・鳩山町の平成二十六年九月定例会に坂戸市の広域静苑組合加入議案が提案されることとな

り、これらすべての議会でこの議案は可決されるに至った。ここに坂戸市民の長年の懸案であった火葬場問題が解決されたのである。

これによって本年秋には静苑組合の変更規約は県知事許可となり、坂戸市の組合加入が確実となるのである。

ただし、所管人口十三万人の組合に後から十万人を擁す坂戸市が加入することになるため、加入の前提には新たに火葬炉4炉、待合室4室を増設する必要があり、坂戸市の組合加入はこの増設工事完了を待つことになるが、それでも早ければ三年待たずとも坂戸市民が火葬を待たされず親族の葬送を執り行える道筋がついたのである。

就任からわずか2年で市政懸案を解決

市民本位の実行力の成果・石川市政の大きな前進!!

市内の有識者は今回の静苑組合加入について「石川市長は日頃から近隣自治体とは仲良くすべきだと言っている。お互いに助け合うことの必要性が伝わり、異例の速さで広域圏の組合加入が進んだのは、坂戸市にとって真に喜ばしいことだ。」と述べている。

振り返れば、昭和五十一年から早三十八年が過ぎ、気の遠くなるような長い期間、坂戸市は火葬場確保ができず、多くの市民がその実現を待ち続けていたのであった。長年の悲願がようやく広域静苑組合加入という手法によって叶うこととなったわけで、坂戸市民にとってまさに歓迎すべき成果であり、石川市長の行政手腕による悲願の実現であると言え

よう。本紙はこうした市民本位の市政を誠実に履行する市政を高く評価するものである。

今日、火葬業務だけでなく下水道事業やごみ処理業務など多くの行政事務は広域化による共同処理の手法で進められている。財政的に厳しい自治体が単独で処理するよりも広域化によるスケールメリットが働き、広域住民にとってはより良いサービスが受けられるという利点がある。

坂戸市の静苑組合への加入を当てはめてみると、坂戸市は自前の火葬場建設と比較し安価な経費で市民が待ち望む火葬場を確保できるわけであり、一方の受入側の組合構成自治体では坂戸市の負担で新たな火葬炉が整備さ

れることとなり、さらに人口比率の高い自治体の加入によって維持管理経費や既存施設の改修経費の負担が軽減されることとなり、将来のピーク時を想定した新たな施設整備が整

うなど、いずれの自治体の住民にとってもデメリットはなく、広域化による共同処理はお互いにメリットをもたらす最良の選択であったと言えるのだ。

先を見据えた財政運営と やるべきことは確実に実行姿勢

静苑組合加入を実現したように、石川市長の市民本位で見据えた懐の深い施策実施には改めて感嘆の意を表すものである。本紙では今後も地域に即したこうした有意義な市政の実践例を取り上げ、自治体のモデルケースとして読者諸氏に届けていきたいと考えている。

石川市長が掲げた公約には「財政再建への取組み」、「子どもの教育にお金をかける」との公約もあった。財政再建の取組はいざというときの緊急的な財政出動に備え、四年間で四十億円の基金を蓄えるというものであったが、就任二年目となった平成二十五年度の決算をみると財政調整を目的とする基金残高は約三十四億円となっており、着実に実現に向け進んでいることがわかる。

また、子どもの教育にお金をかける取組についても、廃校した北坂戸中学校跡地の売却によって十六億四千八百万円という売却益がありながら、一切他の事業財源とはせず、教育財産の処分で得た利益は子どもたちのため

に還元するという強い信念の下、新たに教育子ども基金を設置し、平成二十六年三月補正予算にその全額を積立て、さらに平成二十六年当初予算では市内の小中学校全てにエアコンを設置する事業費を計上し、さっそくこの基金の一部をその財源に充てたのである。

石川市長は常々「子どもは市の宝。将来を担う大切な人材」と述べていると聞く。実際、就任直後から市内の小中学校に出向き、登校時の子どもたちに毎朝声を掛け、子どもたちの態度や行動の変化を感じ取る活動を続けているのもその表れであろう。

国の施策や景気の動向によって市民生活が左右されないよう、いざというときの備えの必要性を説きつつも、明日を担う子どもの教育のために必要と判断したならば速やかにその手立てを打つ。この姿勢は今回の静苑組合加入と同じように、先を見据えた市長としての適切な判断力があればこそ成し得たものであろう。

住民サイドに立った視点 分かりやすさに共感！

また、公約の石川きよし市長の目指すものの中には「行政サイドではなく、住民サイドに立った市長を目指します」という宣言がある。市長に就任するまでの十六年間、四期連

続して市議を務めていた頃から培った感覚をストレートに表現したもので、現在政策決定の中心的な考え方となっている。

市議当時からごみ問題に関心があったとも

聞いており、自宅周辺に散乱しているごみを分別して自宅に保管し、収集日前には自宅の敷地がごみ袋でいっぱいになったこともあったようだ。市長就任後は「ごみは宝の山」を持論としてごみ処理の現場に出向き、ごみ処理の実態を確認している。分ければ資源となる紙類が依然として燃やせるごみとして出されている現状をみて、さっそく雑がみ分別の徹底を指示するとともに、市長自らがあらゆる機会を通じ「雑がみは、燃やすと経費がかかる、分ければ売却益を生む宝となる」の広報マン役となり、現在も市内いたるところで説いている。就任二年目には市内全世帯に分別袋を配布し、市民総ぐるみの雑がみ分別をお願いしてきた結果、坂戸市の可燃ごみ総排出量は就任一年目の平成二十四年度が前年比△百五十九トン、二年目の平成二十五年度はさらに△八百二十三トンと驚異的な減少となったのである。

これも市議時代からの持論「行政サイドではなく、住民サイドに立った市長を目指します」を物語る市民目線に立った代表的な取組事例と言えよう。

今後も石川市長の市民目線に立った行動力によって、坂戸市政は前進するであろうことを大いに期待するものであり、公約の実現ぶりを注視していきたいと考えている。いま一度いう、石川市長の広域静苑組合加入への働き見事であった。

本紙は長い年月、各自治体首長の裏面を覗いてきた。

中には、自治体首長とは名ばかりの俗物が市民の人気を得るために、いかに美辞麗句を並べ立てたスローガンを掲げたところで、首長とその取り巻きによる個人的欲望を満たす背信のプレーに走るだけでは、庶民の住み暮らす町の市政は荒むばかりで明るい未来の展望などは望むべくもないのだ。

市民が求めるリーダーの必須条件とは、高い教養と至高の倫理・高潔な人格であり、市民に奉仕する庁舎職員の更なる資性の向上を促進し、常に市民のための福祉事業の発展に向ける視線を反らさず、市民の要望にも是は是、非は非を明確し、人目を引くパフォーマンスを避け、市民のための政策を一步一步確実に踏み固めて歩む姿勢こそが理想のリーダーなのだ。

本紙は久しぶりに気持ちのいい取材をさせて戴いた。坂戸市には、市民の為の事業に脇目（わきめ）もふらず邁進する市長、その激務を補佐し、同時に温く職員を励ます副市長、そして事業目標貫徹に専心、事に当たる職員との三位一体の活動が、これからの坂戸市を更に向上させるであろう。石川きよし市長のリーダーシップに期待する。■